

農のうを憫あわれむ

李り

紳しん

禾かを鋤すいて日ひ午ごに当ある

汗あせは滴したたる

禾か下かの土つち

誰たれか知しらん盤ばん中ちゆうの殮そん

粒りゅうりゅう粒りゅうりゅう皆みな

辛しん苦くなるを

【作者】李紳(七八〇から八四六年)。中唐の詩人・政治家。字は公垂。無錫の人。中唐の四王に仕えた。

【語釈】\*憫農…農民を憐れむ。 \*鋤…たがやす。鋤(す)く。 \*禾…イネ。穀類。アワ。

\*當午…真南にある。真南に高く上っている。正午である。太陽がちようど午(うま)の方角にある。 \*滴…したたる。  
\*禾…稻。穀類の総称。 \*盤中餐…食器の中のごちそう。 \*粒粒…一粒一粒。 \*皆辛苦…すべてが苦勞の結晶である。

【通釈】夏の炎天にさらされて、農夫は稲の畑を耕すに、汗はだらだら流れて畑地に滴っているのを見ると苦勞のほども思いやられる。しかし、一般の人々は毎月食する碗の中の飯が一粒一粒みな農夫の汗の結晶であるということを知っているであろうか。